

金碗大輔の原像：『南総里見八犬伝』私論

著者	石川 秀巳
雑誌名	国際文化研究科論集
巻	2
ページ	236-224
発行年	1994-12-20
URL	http://hdl.handle.net/10097/34425

金碗大輔の原像

——『南総里見八犬伝』私論——

石 川 秀 巳

一

『南総里見八犬伝』肇輯卷之一から第二輯卷之二までの七卷（第一～十四回）は、八犬士出生の因を語って八犬士伝のための発端をなす部分である。これを前後二段に分けて把握することができる。

前半、結城の戦場を逃れて安房に渡った里見義実が山下定包を討伐し長狭・平群二郡の主となるまでの物語は、その骨格を『里見軍記』など坊間の史書に載る安房里見氏の建国物語に得ている。そこから伝奇的の世界を立ち上がらせていく構想の要諦は、定包と通じて先君神余光弘を謀殺し国を奪った妖婦玉梓を導入することにあった。

麻生磯次は玉梓の形象に『封神演義』の妲己の面影を見ようとした⁽¹⁾。

次のこともその裏づけとなるかもしれない。定包討伐を安西景連・麻呂信時に迫った義実が、その家柄・才智を恐れる景連によって、軍神への供物として鯉魚を釣るよう求められる挿話である。義実は、無礼と怒る堀内蔵人・杉倉木曾介を制し、太公望呂尚の故事——渭浜に釣

して周の文王に値遇した呂尚は、文王・武王の軍師となり、殷の紂王放伐に大功を挙げて斉に封ぜられた——を引いて、祥瑞であると祝ぐ。それに照応して、鯉を釣りあぐねる義実と金碗八郎との出会いが定包討伐・領地獲得の端緒となるのだから、（主客は顛倒するものの）ここでの義実が呂尚に擬せられるとすれば、義実によって討たれる定包・玉梓は紂王・妲己にあたることになるだろう。しかし、寵を得るや酒色を勧めて主を籠絡し、忠臣を追ひ、奸臣と結んで暴政を恣にする玉梓の人物像は、悪妃造型に通有のものであり、それだけでは妲己との直接的な関係を認めがたい。

麻生が重要な論拠とした玉梓処刑をめぐる挿話も、『封神演義』第九十七回の妲己誅殺の場面よりは、むしろ『陸奥話記』安倍貞任滅亡の条の次のような記事によったと見るべきではないだろうか。

貞任が子の童、年十三歳。名づけて千世童子と曰ふ。容貌美麗なり。甲を被柵の外に出でて能く戦ふ。驍勇祖の風あり。將軍哀憐して之を宥さんと欲す。武則進みて曰く、「將軍小義を思ひて巨

害を忘るゝことなかれ」と。將軍領き、遂に之を斬る。(2)

この挿話の構成は、(1) 賊將安倍貞任が討たれ、その子千世童子の罪が問われるとき、(2) 「容貌美麗」の少年の奮戦ぶりを哀れと見た八幡太郎義家はその処刑を許そうとするが、(3) 義家軍の將清原武則に諫められると、(4) 前言を翻し、改めて処刑を命ずる——のようにより把握される。玉梓処刑の場面は、(1) 山下定包を討った後、義実は、定包と通じて国政を壟断していた光弘愛妾玉梓の処刑を命ずる、(2) 玉梓が助命を乞うと、義実は「玉なすごとき玉梓が。さばかりの疵ありぬとも。非を悔て助命を乞ふ。これも亦不便也」(3) と有免の命を発してしまうが、(3) 金碗八郎に、玉梓こそが定包に次ぐ賊婦であり許すべきではないと諫められると、(4) その言に従い、改めて玉梓の斬首を命ずる——とまとめられるのであり、両者は同じ構成を持つ。『封神演義』には、その妖艶な魅力によって同情を引き死を免れようとする妲己が書かれはするけれども、姜子牙(呂尚)による一旦の助命とその撤回という要素を欠くのである。

もっとも、『今昔物語集』巻第二十五「源頼義朝臣尉安陪貞任等語第十三」などに同話が載り、たとえば『前太平記』巻第三十一「千代童子事」には「哀憐」の情を誘うような少年の戦いぶりが詳しく語られるもするから、典拠を『陸奥話記』に限定するわけにはいかない。いずれもその可能性があると言うべきだろうが、『八犬伝』のこの挿話が『千世童説話』に基づいていたことは確かだと思われる。

こうした挿話を介して、馬琴は、史書に依拠する里見氏の建国物語

の中へ、助命の撤回という義実の「口の過」に起因する玉梓の呪詛を、言わば起爆剤として、忍びこませた。玉梓は言う。

義実もいふがひなし。赦せといひし。舌も得引ず。孝吉に説破られて。人の命を弄ぶ。聞しには似ぬ愚將也。殺さば殺せ。児孫まで。畜生道に導きて。この世からなる煩惱の。犬となさん。(第六回)

この呪いの支配のもと、伏姫割腹・八玉飛散に至る発端部後半の物語を前半の史伝的展開から離陸させる。そうした伝奇的構想によって、八犬士伝本伝の世界は始動することになる。

幻想物語の文法に従って、「児孫まで。畜生道に導きて。この世からなる煩惱の。犬とな」という呪詛は比喩であることをやめ文字通りに実現するのだが、人と犬の間の出生という設定を支える論理は△高辛氏神話△に依拠した。馬琴が「援引事実」として引いたのは次のようなものである。

- ① 昔高辛氏。有犬戎之寇。帝患其侵暴。而征伐不克。
- ② 乃訪募天下。有能得犬戎之将呉將軍者。賜黄金千鎰。邑万家。又妻以少女。有畜狗。其毛五彩。名曰槃瓠。
- ③ 下令之後。槃瓠俄頃銜一頭泊闕下。群臣怪而診之。乃呉將軍首也。帝大喜。④ 且謂。槃瓠不可妻之以女。又無封爵之道。議欲報之。而未知所宜。⑤ 女聞以為。皇帝下令不可違信。因請行。帝不得已。以女妻槃瓠。
- ⑥ 槃瓠得女。負而走。入南山石室中。險絶人跡不至。經三

年。生^{ユリ}六男六女。⑦槃瓠^{ハツカ}因^ユ自決^{ツカ}妻。好色^{コシキ}衣服。製裁^{セイサイ}皆有^{アル}尾。其母^{ハハ}後^{ノチ}以^ニ状^{シテ}白^ク帝^ニ。於^ニ是^ニ迎^ム。諸子^{シヨウジ}。(中略)其後^{ノチ}滋蔓^{シマン}。号^ナ曰^ク蛮夷^{マンイ}。(第九回)

定包討伐後安房を二分した義実・景連間の戦に「犬戎之寇」という要素を置き換えて、右の典拠は以下のごとく物語化される。

①飢饉となった里見領は安西の軍に攻められ、籠城を続ける。②死を覚悟し、明日は撃って出ようという夜、義実は八房に向かい、景連の首を取ったなら伏姫と娶せると戯言を言う。③深夜、八房は景連の首を取って帰る。安西軍は総崩れとなり、里見軍は逆転勝利を得る。④伏姫に迫る八房を、義実は人畜の境を犯すものとして刺殺しようとする。⑤が、伏姫は信を守るべきだと父を諫め、八房とともに富山深く籠もる。⑥山中の生活のうちに八房の気を受けて伏姫は妊る。⑦伏姫奪還を計った大輔は八房ともども伏姫を射殺する。伏姫の胎内から発した白気が八玉を諸方に飛散させ、八犬士出生の因となる。

従来認められてきたとおり、発端部後半の伏姫・八房をめぐる物語の構成はみごとに〈高辛氏神話〉のそれと合致する。玉梓の呪詛を起点とし、犬と人との間の子が蛮夷の祖となるという始祖伝承に拠って八犬士の誕生を語っていく物語の根幹は、疑いようもない。しかし、⑦の伏姫殺害者としての金碗大輔は、対応する要素が原拠に認められないのである。〈高辛氏神話〉では、犬の子を産んだ娘は犬と別れた後無事に帰国したごとく語られる。それに対して『八犬伝』は、大輔による八房狙撃とその結果としての伏姫誤殺を設定したわけである。

高田衛は、同根の異類婚姻譚である〈犬婿人〉民話の、犬を殺し娘を妻とする山伏(獵師)に、「獵人」大輔の典拠を想定した⁽⁴⁾。が、そこで娘の産むのは山伏の子であり、犬の子を産むと語る〈高辛氏神話〉や『八犬伝』とは異なる。また、山伏に娘殺しの要素はない。逆に娘が、夫である犬の仇として山伏を討つのである。両者の構造が同一であるとは認めがたい。高田は八房殺害を重視して民話との類似を言うのだが、大輔の役割は伏姫を死に至らしめるところにこそ認められなければならない。

では、伏姫殺害者としての金碗大輔は、どこから発想されたのだろうか。

二

列伝部における大輔(出家して、大法師)の役割は、飛散した数珠玉を求めること、すなわち諸国に隠れた犬士たちを発見し安房里見家へと糾合することである⁽⁵⁾。富山を出立して二十余年、下総行徳の旅宿古那屋に現れた、犬は、犬士たちにその出生をめぐる宿因を明かし、安房参候という行動目的を自覚させる。さらに数年の後、甲斐国石禾指月院の住持として再登場したときには、結城古戦場での戦没者慰霊の大法会を予告する。それは荒芽山の厄難のために関八州に散らばった犬士たちを安房に向けて結集させる契機として働く。また、『八犬伝』を始動させた結城合戦の死者たちを鎮めることで物語を終熄

させる、大団円のための趣向でもあっただろう⁽⁶⁾。八犬具足後の関東管領軍との大戦あるいはその戦後処理においても重要な働きを見せるのであり、大輔Ⅱ、大が八犬士の物語を領導する最重要人物の一人であることはまちがいない。

ところで、大輔が出家し八犬士嚮導の旅に出たのは、伏姫殺害の罪を償うためであった。玉梓の呪詛によって伏姫は八房とともに富山に籠もることになったわけだが、伏姫誤殺という大輔の失策も、玉梓の怨恨に起因したのである。

神余の臣金碗八郎は、玉梓に惑溺し政治を顧みなくなった主を諫めかねて出奔、東国を流浪していたが、光弘の横死を知ると帰国して復仇の機会をうかがった。義実との出会いを契機に宿願を果たした後、戦後の論功行賞において東条の城を与えようという義実の沙汰を拒否、切腹してしまう。馬琴は、それが義士としての意志的な死であり怨霊の力には関わらないと断言する(『大夷評判記』中之巻)。八郎もまた、落羽が岡に光弘を誤殺した柚木朴平・洲崎無垢三が自分の家僕であったことの責めを負い、二君に仕えずという武士の倫理に殉じるのだと言う。しかし、玉梓は、頑強に処刑を主張した金碗八郎に向けても、
 怨しきかな金碗八郎。赦んといふ主命を。拒て吾儕を斬ならば
 汝も又遠からず。刃の錆となるのみならず。その家ながく断絶せん。

(第六回)

と呪いを投げかけていたのだし、「二子を遺して孝吉大義に死す」の挿絵(第七回)は八郎切腹の場面に玉梓怨霊を出現させるのだから、

そこに呪いの揺曳を読み取らないわけにはいかない。ただし、「玉梓が悪念は。良将義士に憑ことかなはず。その子その子に責縁て」(第六回)とあるように、玉梓の呪詛は良将(Ⅱ義実)・義士(八郎)ではなく、「その子その子」つまり義実の子伏姫や八郎の子大輔においてこそ発動すると見るべきなのであろう。瀕死の八郎に対して義実はその子大輔を引き会わせ、成人ののち東条の城主しよう大輔の栄達を約束するのだが、

金碗八郎が死果るとき(中略)。陰々として心火閃き。女子の像影のごとく。大輔が身にそふて。かき消す如くなりけり。

(第七回)

と書かれており、玉梓怨霊のもたらす災いが大輔に及ぶであろうことを予示している。八郎が「刃の錆とな」って死ぬだけでは「その家」の「断絶」を意味しないのだとすれば、「その子に責縁て」金碗氏の存続を否定するような事件の招来をも、玉梓は予告していたことになる。

呪詛の発動を誘う情況も先行文芸の引用によって設定される。玉梓処刑から十数年の後、安房・朝夷両郡凶作のときに、義実は安西に義援の米を送った。翌年逆に平郡・長狭の里見領が凶作に見舞われると、国力疲弊に乗じて景連は滝田攻撃の兵を起こす。これは、徳田武が指摘したとおり、『通俗列国志』巻第十五「秦穆公救晋饑民」に抛りつつ攻守の「設定のみを反対に作り変えたもの」だろう⁽⁷⁾。秦の臣公孫枝は、隣国晋からの救援依頼に際しこれを好機として晋を攻めるべきことを言い、翌年の飢饉の時には貸米返済を要求すべきだと

主張する。安西領凶作の折に今こそ攻略の時だと主張する大輔の言は、公孫枝のそれを受けたものに違いない。これも公孫枝の言を写した大輔の進言によって、米の返済を求める使者として大輔が安西の館山城に派遣されるところから、馬琴は典拠はなれ始める。それが、玉梓怨霊の影響下に大輔の人生を狂わせていく契機であった。

安西は使者大輔を欺いて城に止め、すぐさま里見を襲った。大輔がようよう帰り着いた時には、滝田・東条の両城はすでに大軍の取り囲むところとなっていた。大輔は、使者の役目を仕損じ主君の危急に遅れてはもはや帰参は叶わないと、一旦は「戦死」を覚悟し、また、それよりは鎌倉の足利成氏に援兵を乞うほうが「わが恨を申し寛る。因が」となると思い直す。しかし、鎌倉では義実の使者と称して疑われ失敗、安房に戻ると、八房の活躍によって里見方が勝利をあげたあとだった。ここでも大輔は機を逸してしまう。「懈怠を勧解」る「時節を俟て」いた大輔は、伏姫が八房とともに富山に入ったことを聞き、われ彼山にわけ登り。八房の犬を殺して。姫君を俱し奉り。滝田へかへし入れ奉らは。賠話ずともわが先非を。ゆるされん事疑ひなし。

(第十回)

と、禁を犯し富山に入山するのである。

しかし、八房を狙って大輔の放った二つ玉は、八房に命中したばかりか、伏姫をもうち倒してしまふ。伏姫救出を期した「忠義は不忠となりて。又万倍の罪を醸」(第十三回)すことになった不運を嘆く大輔は、その罪をわびるために切腹を試み、義実になだめられて剃髪す

るのである。大輔の出家によって、後嗣誕生の可能性が否定され、金碗家は断絶することになる。八郎の死と伏姫の人獣交婚の運命を予告するだけではなく、大輔の失敗をも射程に入れた玉梓の呪いは、こうして実現する。

畜生道に落とされた伏姫は、義死によってかえって八犬士の「母」となり、里見の繁栄を支える。金碗氏の断絶も八犬士による姓氏の継承によって救われることになるのだが、それはまだ遠い先のことであり、そのためには贖罪のための大輔Ⅱ、大の辛苦が積み重ねられなければならない。大は、霊山霊社をめぐって「伏姫君の後世を弔ひ」義実・義通「御父子の武運を祈」りつつ、八犬士具足を促し里見家興隆を図る旅へと出立する(第十四回)。そこから、列伝部以降の物語を領導する前述の役割に結びついていくのである。

そうとすれば、『通俗列国志』の公孫枝的人物をもとに造形された金碗大輔像の独創は次のようなものとしてまとめうるだろう。すなわち、失策によって主家に帰ることができなくなり、失地挽回を図ったはずの行為からかえって主家の姫の殺害というもうひとつの罪を犯し、その罪を償うために諸国を巡って主家の興隆を支える者たちを捜し出す——そういう役割を担う人物としてである。

〈高辛氏神話〉の利用に立ちもどって換言しよう。「犬戎之寇」とのみ書かれ空白であった戦の内実は、『通俗列国志』に拠りつつ、義実がその仁性ゆえに不義者景連のために籠城に追い込まれ苦戦するというように充填される。景連の侵攻を誘ったのが大輔であり、また、

犬士誕生の因となる伏姫の死をもたらしたのも大輔である。つまり、〈失敗する使者〉大輔の設定によって〈高辛氏神話〉を外側から枠づけて、発端部後半の物語が構想されたと見られる。そして、大輔Ⅱ、大が数珠玉Ⅱ犬士を求めて旅立つことで列伝部への接続が図られるわけである。

こうした大輔像は、歴史背景を提供した『里見軍記』などの稗史類にも、伝奇的な構想の基盤となった〈高辛氏神話〉にも見出されないものであった。

改めて問おう。金碗大輔とは、何者であるのか。

三

『八犬伝』執筆に先立つ文化五（一八〇八）年、馬琴は『俊寛僧都嶋物語』前・後編八巻八冊を刊行する。平家転覆を図って流刑に処せられた法勝寺執行俊寛僧都が、鬼界島で落命せず密かに帰洛し、鬼一法眼と名を変えて牛若丸に虎の巻を伝えるという物語であり、『平家物語』に載る俊寛の事跡に基づきつつ、浄瑠璃『鬼一法眼三略巻』（享保十六（一七三一）年初演）や『源平布引滝』（寛延元（一七四八）年初演）から得た材料を、『漢楚軍談』の張良・黄石公の故事の枠にはめこんで構想されている⁽⁸⁾。その中で語られる牛若丸・証門太郎の平清盛襲撃失敗は、張良・蒼海公の博浪沙における秦始皇帝襲撃の説話を典拠とする。『八犬伝』も、『三国志演義』第六十三回の鳳雛

が落鳳坡に狙撃される一段と組み合わせ、蒼海公の二俠者による山下定包襲撃失敗を語るのであり、馬琴は『嶋物語』に使った材料を『八犬伝』で再活用している。金碗大輔も、その前身を『嶋物語』に登場する俊寛僧都の童黒居の亀王に見ることができ。

『平家物語』流布本は鬼界島に渡り主の死に立ち会った有王のみを俊寛の童として登場させるが、「俊寛僧都嶋物語引用書目姓氏古跡出証」に典拠として明示された『長門本平家物語』『源平盛衰記』には、亀王・有王兄弟の名が見える。両本の記事の交叉するところに「越前国水江の庄の住人。黒居三郎が子ども」「亀王蟻王といふ兄弟の童」（第一套）⁽⁹⁾を登場させたのである。とは言え、『平家物語』では亀王の行動についてほとんど述べられない。流布本には登場せず、『長門本平家物語』では亀王丸がいつの間にか松王丸にすり替わり、その松王丸も法師になったとされてすぐに記述の対象から外れてしまう。亀王が実際に登場するのは、『源平盛衰記』の、淀の船着場で流人船に乗り込む直前の主と対面を果たすところのみである。これとても流布本は有王の行為として語るのであり、総じて亀王の影は薄いと言わなければならない。この淀での主従対面というわずかな記事に、『嶋物語』の亀王設定の根幹が置かれた。

馬琴は鹿谷の謀叛が発覚する前から亀王を登場させる。第一套「抱玉 有罪とは／情に援れて帰ることを忘れし／黒居亀王が事」である。俊寛は、平家打倒のための軍用金・兵糧を準備しようと考え、しかしそのわけを秘したまま亀王を莊園催促に派遣する。ところが亀王

は、越前三国の港で、白拍子となつて接待の席に出た幼馴染み渡海に再会すると、その「情に援れ色に惑ひ」「都へかへることもうち忘れ」遊興・身請のために「要金二三三百両」を使いこんでしまふ。亀王の行動は、

こゝも名におふ水江の里。浦嶋ならぬ嶋浦が。その女兒なる渡海に。遊び戯りて帰るを忘れし。惑はおなじ亀王は。……(第七套)と語られるように、「亀王」という名および「水江」という共通の地名を媒介として、『日本書紀』雄略記に載る「浦島子」のそれと重ね合わせられる。釣り上げた大亀の変じた女を妻として蓬萊山に至り、そこで三百年もの間の歓楽に故郷へ帰ることを忘れてしまった浦島と惑いを共有して、亀王は「遊び戯りて帰るを忘れ」た男として造型されているのである。

こうして使命を放擲し主家への帰参が叶わなくなった亀王が、主の急を聞いて淀に駆けつけるという形で、亀王の〈史実〉を虚構によって裏づけて見せる。それ以降、典拠の空白を埋めるように語られていく亀王の行動も、右に述べた造型を核とする。すなわち、罪を悔い自害しようとする亀王に対して俊寛が言い置いた言葉に規定されるのである。

悞を悔ひ恩をしらば。死すべき身を存命て。松の前と子どもら
が。往方を索。蟻王に力を戮して。主の心を安からせよ。

(第六套)

俊寛は、繰り返して、「自の悞を。贖ふ程の功をたて」たなら自分

にかわつて妻松の前が「勘当を免すべし」と言いもする。女に惑溺して主の金を使い込み、使者の役目を仕損じた亀王は、失敗を償うことによって帰参の許しを得ようと願うことになる。

松の前母子のありかを捜し、使い込んだ金を調達して、勘当のわびをせよという父三郎の遺命によって、その辛苦は要金を稼ぎ出すことに向けられる。物語の末尾、鬼一法眼の弟子白河湛海と姿を変えていた亀王は牛若丸と争い、斬られる。血に塗れた亀王が声を励まし語る「懺悔」の言葉から、淀での対面以後の亀王の行動がいかなるものであつたかを聞いてみよう。

夫婦阿容々々と存命つゝ。いかにもして彼金を。調達せばや。と旦夕に。いくその胸を苦しめても。なす事もなき浪人の。丹後の浦嶋に船漕で。流れ渡りの楫枕。苦に寝て待ど果報も来ず。せんすべ竭て悪計。人の女兒を拐掣し。道ならぬ金もやうやくに。五十金には満汐の。闇の夜船へ少女子が。人に追れて迷ふを。……

(第十六套)

要金を調達するために、「なす事もなき浪人の」亀王夫婦は「せんすべ竭て」人さらいを業いとするようになったという。そうしたある日、平家の手の者に追われて逃げ込んできた俊寛娘鶴の前を、それとも知らずに拐そうとし、抵抗する義妹安良子ともども殺してしまう。自分たちの殺したのがまさに鶴の前であつたことを、たった今知つたのである。

右に述べてきた亀王の行動は、(1) 平家討伐の軍用金を荘園から

催促してくることを俊寛に命じられるが、(2) 旅先で渡海への愛欲に迷って要金を使いこみ、主家に帰ることができない、(3) その間に鹿谷の陰謀が顕われ、俊寛は流罪、松の前・鶴の前・徳寿丸は平家の追手から身を隠す、(4) 帰参のために人買いとなって金を作ろうとするが、(5) 主の娘鶴の前を殺してしまう——のように整理する。同じように大輔の場合をたどてみると、(1) 義実の命をうけて昨年の貸し米返却の要求のために安西に使いするが、(2) 安西に欺かれ、国に帰ることができない、(3) その間に国は安西に攻められ、伏姫が八房とともに富山に籠もってしまう、(4) 帰参のために手柄をたてようと、八房を狙撃し、(5) 誤って伏姫を殺してしまう——というのが、その行動軌跡なのである。〈主命による旅〉〈任務の失敗とお家の危急への遅参〉〈主家の子女の流遇〉〈帰参のための辛苦〉〈主家の子女の誤殺〉と構成要素を整理するなら、伏姫殺害に至るまでの大輔の物語は亀王の場合と重なる⁽¹⁰⁾。

『八犬伝』の諸典拠に見出すことのできない伏姫殺害者としての大輔の設定は、里見氏の建国物語の背景の中に『通俗列国志』の公孫枝的人物を取り来たって、そこに馬琴自身の旧作『俊寛僧都嶋物語』の亀王を重ね合わせることで成ったものである。

四

伏姫殺害者としての大輔像が亀王像の再生であったと見うるにして

も、大輔像のもう一つの面については別に考えなければならない。表舞台から姿を隠した亀王は、入水した俊寛を救い上げ鬼一法眼への変身を支えるなど、背後においてさまざまな因縁を繋ぎ合わせる、鍵となる人物である。しかし、「松の前と子どもらが。往方を索^{たづね}」よと命ぜられながらそれを果たすことを放擲してしまうあたり、八犬士を嚮導する大輔Ⅱ、大には対応しないと言わなければなるまい。主家の娘殺しの事実を知った段階で死んで行く亀王と、死を宥められ出家する大輔との違いでもあろうが、主家の子を探し出し主家興隆を実現させるといふ、八犬士糾合者としての大輔像は、亀王像から継承したものではない。新たに大輔に負わされるこうした役割は、しかしながら馬琴の独創にかかるものでもなかっただろう。亀王像のさらに原型に遡及するならば、そうした役割をも併せ持つ人物が見出されるからである。近松門左衛門の『双生隅田川』(享保五(一七二〇)年初演)、商人猿島の惣太こと淡路七郎がそれである。

『双生隅田川』第一段において、吉田家奥家老淡路前司兼成は次のような嘆きを漏らす。

せがれ淡路^{あはぢ}の七郎俊兼殿さまの御めをかすめ。ばくたいの黄金^{わうこん}悪^{わる}狂^{くる}ひにつかひはたし。縛首^{しばり}をも刎^はらるべきに。御ふだいの我が子とて命を助国^{こくえん}遠^{とく}仰付られしも。……⁽¹¹⁾

かつて、その子七郎は傾城に溺れ公金を使い込みながら、死を許され勘当に止められたのだった。その御恩に報いるために、「せがれが奉公一所に二人^{ふたり}まへの忠義」を尽くそうと期していた兼成は、天狗に

惑わされ御台所を殺害した吉田少将の罪を着て自害する。だが、そうした報恩・忠義の意図は、まだ舞台に登場していない淡路七郎自身が激しく胸に抱くものでもあった。

第三段、隅田河原辺の惣太住家を舞台に行なわれた梅若殺しの直後、その残忍な人買い猿島の惣太こそ十一年以前勘気を受け女房唐糸とともに武蔵に下った七郎の零落した姿だったことが明かされる。しかも、先非を悔い、

主君をかすめし一万両の金一生につくのい。御きげんを取りなをし若君達の御馬の口。くつそうりをつかんでもふだいのお家にみやつかへ。忠孝をつくしおや前司にも悦ばせ。孝の道をたてんと玉しるに思ひ定め

て、勘当の赦免と帰参を願っていたというのである。このような七郎の設定は、白拍子渡海への情に引かれて公金を使い込み、その罪を償って勘当を許されようと願う亀王にそのまま重なる。亀王の場合は面前で、七郎の場合は彼の知らぬところと異なりながら、ともにその父親が息子の罪ゆえに腹を切るのも共通点として挙げてよいかもしれない。亀王が「浪人のたつきもしらず」人買いとなり果てたのと同じに、「あきなひひしらずかうさくしらず」七郎も、人買いのための証文代筆をきっかけに、自身が人買いに落ちたのである。

「十年以来のちりつもつて。此金九千九百九十両。今十両で願成就」という焦慮が、働きが悪くて戻された少年に対する折檻を苛酷にした。実は吉田少将の嫡子梅若丸であるとも知らず、七郎はそ

の少年を死なせてしまう。吉田家の没落を七郎が県権正武国に聞かされるまで知らなかったのも、渡海に迷っている間に主の流罪を聞きあわてて淀に駆けつける亀王の境遇に類似する。お家の大事に遅れ、一方で償いのための辛苦がかえって主家の子女を死に至らしめるという、行き違いの悲劇を担う人物である点で、七郎と亀王は近似するのである。ちなみに惣太女房唐糸が渡し船の船頭になるという点も、亀王とともに舟を漕ぐ渡海に通ずるのではないか。

鶴の前殺しの事実を知った亀王が牛若丸に斬られその身代わり首となるように、七郎は、たった今手にかけたのが故主の若君であることを知り、吉田家旧臣淡路七郎俊兼として主の仇猿島の惣太を討つのだと、切腹して果てる。両作の間には字句の上での類似は認められないが、無関係であったとは考えにくい。七郎が亀王の前身であることはたしかだと思われる。

馬琴が『双生隅田川』を参照したと考える別の事情も存する。馬琴の近松への関心はたとえば『著作堂一夕話』（享和四（一八〇三）年刊）「近松門左衛門作文の自序」などに窺われるし、とりわけ『双生隅田川』には『鳴物語』執筆の直前に深く関わったことがあった。承久の変を背景に梅若伝説を素材とした読本『墨田川梅柳新書』が文化三（一八〇六）年に刊行されるが、それは『双生隅田川』をもとに構想されたものである。そこに登場する人買い忍の惣太は明らかに近松作によっている。ただし、主殺しに至る猿島の惣太の悲劇は忍ぶの惣太に引き継がれず（主殺しの趣向自体は身替わり死による偽装へ

と転換され、『嶋物語』の亀王の造形に生かされたのである。

七郎切腹の場面までを検討するなら、失地挽回を期しながら伏姫誤殺を犯す『八犬伝』金碗大輔の人物像は、近松門左衛門作『双生隅田川』の猿島の惣太こと吉田家旧臣淡路七郎から自作『俊寛僧都嶋物語』の黒居の亀王を経由して成立してきたと考えられる。

さて、主家の興隆を支える人物を捜し出すという大輔の役割に対応する要素が亀王には認められないと先に述べたが、それを七郎に見出すことができる。七郎は切腹するときに、こう言う。

我一ッの所存有。梅若の御ことはいふてかへらず。天狗にとられし松若の行ゑは天狗ならではしりがたし。今我腹わたをつかんで天にさゝげうつたへ。十一年つもりしがまん心。まだうに入て天狗と成。やま／＼たけ／＼しん山しんこくあらゆる天狗のすみかをさがし。松若君を尋もとめ吉田の家の二度のさかへを見すべきぞや。

腸を天狗に捧げて天狗道に入り、天狗にさらわれた松若丸を捜し出すという、命と引き替えの願いは実現する。続く第四段、梅若丸の行方を探ねて讃岐を漂泊する忠僕軍助の前に山伏の姿で現われて、尋ねる人々が東国にいることを示唆し、「天狗風」を起こして「東の方へ吹おくる」天狗が、七郎の後の姿である。また、狂女となり梅若を求めて東に下った班女は、隅田川の渡し守となった唐糸から梅若の最期の様を聞き、塚に詣でその亡霊に直面するのだが、悲嘆の余り川に身を投げようとする班女を止どめ、雲間から現れ出た天狗こそ、淡路の

七郎であった。

さいごの一念によつてまたうに入。しゆくんの恩をほうぜんため。かりに山ぶしとへんじ母きみの旅路を慰め。御嘆きをとどめあいうの念をはらはん為。梅わか君のゆうれいと見せたるも誠は御弟松わか君。ふた子の同しおもかけは御眼にもたがはねば。梅松わかかの二きみとも此君ひとりになくさみ給へ。是こそひらが獄の犬天ぐのつれ行きし松わか君。たゝ今返し奉る……

行方知れずとなっていた松若丸を捜し出し、狂女となった班女を梅若丸の墓に導く。軍助ら忠臣をそこに呼び寄せもする。七郎天狗は離散した吉田家の人々の結集を促すのであり、その通力に守られ、都に帰った少将一家の人々が敵常陸大掾を討って、松若による吉田家の家督相続を語るところでこの浄瑠璃は完結する。

『嶋物語』では俊寛一家の悲運を牛若丸によって救抜するところに物語の基本構想が認められるのであり、歴史事実の制限にもよるのだろう、俊寛家の存続を表面的には語ろうとしない。それゆえ、惣太の担っていた遺児搜索の役割を亀王に負わせる必要はなかった。切腹を制せられ出家した大輔と、己れの命と引き替えに天狗となる惣太の間には、たしかに相違はあるけれども、『双生隅田川』から『嶋物語』への継承の段階では放棄された設定が、八犬士糾合者大輔として『八犬伝』で再浮上したと見られるのである。

五

そうした設定を大輔に割り振ったことによって、『八犬伝』に何が生じたのか。

たとえば、『水滸伝』とは違った物語展開が用意されていた、その理由が見えてくる。英雄たちを捜し出し糾合する役割を担う人物は、『水滸伝』には見られない。王進の逃走から動き始めた『水滸伝』列伝部で、百八好漢の中心にいるのは宋江であるが、宋江が彼等の結集を図るわけではなかった。連鎖的に登場させられ、いつの間にか梁山泊に結義していく百八人の運命的な紐帯は、読者にこそ示されるものの、石碣降下に至るまで彼ら自身の知るところではなかった。「楔子」との間に直接的な関わりを設定することのない『水滸伝』列伝部の構想に対して、『八犬伝』は発端部と列伝部とが連続的に結びつくような世界を作り出したのであり、連結の役割を担うのが大輔だった。

この物語において伏姫の死は、記憶として過去に封じ込められていない。伏姫神女として物語表面に現われ、役行者が予言したような、伏姫を因として生ずるであろう果の実現を推し進めるのである。そうした伏姫の意志を体現しつつ、大輔Ⅱ、大も物語を生きていくと言つてよい。それならば、発端部と列伝部とが連続的であるとはどういうことか。伏姫にせよ大輔にせよ、彼らは親たちの過ちを償わせられる存在なのであり、大輔はそこに自分の失敗の償いを重ねられた。伏姫・大輔はその親たちの失敗を償うために、八犬士はその「父母」である

伏姫・大輔の悲劇を救済するために生きる。そうした親子の主題を明示するのである。

八犬士の「父」としての大輔は、それゆえ、七郎・亀王的な人物像をそのまま継承するわけにはいかなかった。

犯した過ちを挽回するための辛苦がかえって主家の子女殺害を引きおこしてしまうという行き違いの悲劇を、同じように演ずる人物ではあるが、七郎から亀王に継承されながら、大輔が振り捨ててしまった要素がある。それは過ちの質、辛苦の質に関わる。七郎・亀王は、忠義一途の人物ではなかった。女に迷っては任務を忘れてしまい、業いに窮しては人買いに落ちてしまうような、犯罪者性を強調されている。それに対して、大輔には悪への傾きを認めることができない。

伏姫がそうであったように、大輔自身には罪がない。安西からの救援要請があったときに侵攻を進言するのは『通俗列国志』の公孫枝の言動を写しているわけだが、そこで義実に説論されるように、たしかに大輔には判断力の未熟さといった欠点が認められる。安西軍の攻撃が始まったあとの右往左往に、大輔の浅慮を指摘することもできよう。そうであるとしても、大輔は忠義の道から外れることがない。にも関わらず伏姫誤殺を犯させるために、馬琴はそこに玉梓怨霊の跳梁を語るのである。

しかし、注意しておきたいのだが、『八犬伝』は義士節婦たちが跳梁する悪と対決する物語として構想されたのではない。玉梓の怨念は、山下定包はもちろん安西景連すら滅んだ後、安房に仁政が敷かれたそ

の時に始動する。馬琴は、玉梓の「祟をいふものは。文面の仮話也」という（『犬夷評判記』中之巻）⁽¹²⁾。玉梓の呪詛との戦いとは、善者の心の中に生起するものに他ならない。

『八犬伝』は、その物語展開の原動力に、善なる人々の計らず犯した過ちの償いに向けた辛苦を見ている。善なる人々の心の隙間、ほんの小さな裂け目から、悲劇の因は侵入してくる。そこから引きおこされる重大な過ちに対して命をもって償おうとするところに、『八犬伝』の物語世界は成立する。悪なる敵の迫害が善者を苦しめる物語ではなく、善者の心の中に引き起こされる闘争を語ろうとするこの物語を、金碗大輔像は象徴するのである。

注

- (1) 『江戸文学と中国文学』（昭21・5、三省堂）第三章「馬琴の読本に及ぼせる支那文学の影響」第二節「趣向の反映」参照。
- (2) 『陸奥話記』は『玄同放言』などの引用書目であり、『曲亭藏書目録』（日本古典文学影印叢刊32『近世書目集』、平元・10、財団法人日本古典文学会、所収）にも「陸奥話記一冊」と見える。本文の引用は、梶原正昭校注『陸奥話記』（古典文庫70、昭57・12、現代思潮社）による。
- (3) 『南総里見八犬伝』本文の引用は架蔵本（後刷本）による。
- (4) 高田衛『八犬伝の世界』（中公新書、昭55・11、中央公論社）参照。

- (5) 拙稿「八犬士列伝の新構想——『南総里見八犬伝』ノート——」（『和洋女子大学紀要』文系編第18集、昭63・3）参照。
- (6) 拙稿「八犬伝」墓田素藤構想の意義——団円意図をめぐって——」（『文芸研究』第99集、昭57・1）参照。
- (7) 徳田武『日本近世小説と中国小説』（日本書誌学大系51、昭62・5、青裳堂書店）第一章「中国講史小説と通俗軍談——読本前史——」参照。
- (8) 『俊寛僧都嶋物語』の構想については別稿を発表する予定である。
- (9) 『俊寛僧都嶋物語』本文の引用は架蔵本による。
- (10) 河合真澄『八犬伝』と演劇（『国語国文』昭53・11）が指摘するように「二つ玉や狙撃の誤り」は『仮名手本忠臣蔵』の「早野勘平を写したところがある」と思われるが、それをも包含して広い範囲で大輔像と亀王像とが重なると考えたい。河合は「かほど迄する事なす事。いすかの背程違ふといふも」という勘平の述懐と「悲きかなわがなす所。謀る所は悉。鴉の背と岩鰐ひ。…」という大輔のそれとの共通性を挙げるが、亀王の告白にも「みななすことの齟齬。鴉の背の長かれと。祈らねどなほ速き。天罰かくこそありけれ」と類似の修辭が見出される。
- (11) 『双生隅田川』本文の引用は『近松全集』第11巻（平元・8、岩波書店）による。ただし、節章・文字譜等は省略した。
- (12) 引用は、中野三敏編『江戸名物評判記集成』（昭62・6、岩波書店）所収の本文による。

〈付記〉

本稿は、日本文芸研究会平成五年度第七回研究発表会（平成六年一月二十二日、於東北大学文学部）において同題で発表した際の発表草稿に加筆したものである。